
ACfA?リリなの お試し版

ウォリアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ACfA?リリなの お試し版

【Nコード】

N7808X

【作者名】

ウオリアー

【あらすじ】

ACfAとリリカルなのはのクロス小説、そのお試し版です。

続きが読みたい人がいれば続くかも。感想お願いします！！目指せ！！硬派イケメン小説！！

「作戦を確認するぞ。ターゲットは旧管理局の部隊だ。数人の魔道士と複数のノーマル、MTを所有している事が確認されている。こちらの作戦内容は極めて単純。それらを全滅させる事だ。なお、今回のミッションは企業に対するリンクス、高町ヴィヴィオのプレゼンテーションとなっている。……、正直、悪趣味だと思うがこれが俺たちの仕事だ。傭兵としての実力を発揮できないのならどこも雇ってはくれないだろうしな。以上だ。ちなみに魔道士達のランクは精々がBランク相当だ。局地的なテロくらいなら起こせるだろうがネクストの敵では無い。何か質問は？」

青年は淡々とした口調で自身のパートナー……高町ヴィヴィオに声をかける。

「……ありま、せん」

ヴィヴィオは絞り出すような声音で応える。

「今ならまだやめることも出来るぞ。俺とお前の契約内容を忘れたわけでもないだろう」

青年の言葉に対し、ヴィヴィオは何も言わずに俯く。
ヴィヴィオの雰囲気を感じた青年が溜め息を吐く。

「まあ、何をやるのか解っていればそれで良い。訓練はしたんだ。俺はお前が負けることは無いと信じている」

青年の言葉にはある種の確信があった。時空管理局が企業連によつ

て壊滅させられこの娘の母親である高町なのはが戦いの中で行方不明になった後、レアスキル持ちの魔道士のサンプルとしてアスピナに引き取られそうになっていた彼女を拾い、リンクスとして育て上げたのは自分である。

彼女に課した訓練は常人なら三日で音を上げるレベルの物だった。かつて自分が受けたモノに匹敵するレベルの訓練に耐えたこの少女はそこらの相手には敗けないという自負もある。

「……、お前の覚悟は解った。精々死なないように気をつけろ」

ORCA旅団によって、企業の罪が清算された後の世界。企業連による宇宙進出計画が実行された。企業は削られた力を回復するため宇宙と言う新たなフロンティアに飛びつかざるを得なかった。

そこまでは良かった。

その最中、企業はある特質を持った物質を発見する。その特質とは時空間転移。更にその後管理世界出身の魔道士との接触によって、企業は異世界の存在を認知することになる。

企業はすぐにその物質の研究を開始。企業連の総力を結集した研究は瞬く間に成果を上げる事になる。結果、企業は多次元世界への進出を果たす事になる。

そして、それに対し時空管理局（以下管理局と記述）はそれに対して待ったをかける事になる。当然かつ賢明な判断だ。何しろ企業には自らの世界を汚染しつくした前科がある。更には管理局が危険視している質量兵器が彼らの主力だ。

管理局が彼らを受け入れないのは当然の事だった。

そして、管理局は管理局の法に従う事を条件として企業に一部世界での採掘権を認めた。企業の内部には不満の声も有ったもののこの時はこれで手を打つ事になった。

そして、企業連はいくつかの無人世界で資源の採掘を行う事となる。

そして、新暦80年、火薬庫の中に火が投げ入れられる。

第59管理世界において採掘活動を行っていたオームル社の作業員が管理局内部のタカ派と見られる魔道士達に襲撃を受けたのだ。これに対し企業連は管理局に対し謝罪と賠償、更には加害者の引き渡しを求めた。

管理局はこの事態に対し捜査中の案件のため加害者の引き渡しは不可能だが、巨額の賠償金と誠意ある謝罪を持つて応じた。

しかし、管理局の対応に対し管理局に対し不満を持っていた一部の世界の指導者層が反発。更に企業連も圧力をかけていた。

そして、企業連は遂に管理局の打倒を決断。重要な施設にカロードトップクラスのネクストが送り込まれ多くの世界に兵力が送り込まれた。

管理局の主戦力たる魔道士は企業の兵器に対し殆ど太刀打ちする事は出来なかった。特に管理局が企業との戦いを見越して重要な施設に配備していたSランク魔道士はその大半が紛争開始直後のネクストによる襲撃で死亡しており、生き残った数少ないSランク魔道士

も大半がコジマ粒子による汚染症状により戦闘は不可能となつてしまつていた。

その後、管理局は奮戦も虚しく追ひ詰められ続ける事になる。管理局の体質は言つてしまえばリンクス戦争以前の企業と同じ、否、それ以上に個人の能力に依存した組織体系だつた。それ故に主戦力を紛争開始直後に撃破されたダメージは多大な物であつた。

それに追ひ付きをかけるように投入されたアームズフォート（以下AFと表記）によつて管理局は致命的なダメージを受けた。

そして、新暦80年12月25日、伝説の三提督が指揮する管理局の主力次元航行艦隊は一機のネクストにより5分足らずで、管理局地上本部が存在する世界、ミッドチルダの主要都市クラナガンがAFアンサラーによつて殲滅された事により時空管理局はその力を失ひ、企業連によつて解体された。

その結果、管理局時代には水面下で抑圧されていた戦争が表面化するようになった。企業によるテロリスト赤の他人を使った代理戦争が幕を開ける事になる。

結果、管理世界は戦乱の時代を迎える事となつた。

「ミッションを開始する」

青年の言葉がヴィヴィオの鼓膜を震わせる。ヴィヴィオは自身のネクスト……ローゼンタールのLANCERをベースにした機体……のAMSに没入する。

「リンクスだ、リンクスが来たぞ!!」

「クソ!!企業の狗が!!」

ノーマル部隊とMT、それに魔道士達が必死でヴィヴィオのネクスト、クリスに攻撃を仕掛ける。

クリスは^{クイックブースト}QBを使って攻撃を避ける。避けきれなかった攻撃も^{フライマルアーマー}PAに阻まれクリスのフレームに傷を与える事すら出来ない。

「効いているのか…」

「PAだ!!まずはPAを減衰させるんだ!!」

クリスはそれらの攻撃をかわす。迎撃しようと右手のライフルを構えた時、彼女の思考は一瞬止まる。

? ———— これを撃てば、人が死ぬ ————

彼女の躊躇いはAMSを介して機体の挙動に影響を与える。

一瞬挙動が止まったクリスにノーマルのミサイルが向かってくる。

左肩のチェインガンでミサイルを叩き落とす。

「何をやっている」

オペレーターから通信が入る。

「俺はそんな無様な戦い方を教えた覚えは無いぞ」

そして、青年は決定打を放つ。

「まあ、失敗したらお前が死ぬだけだがな」

その言葉がヴィヴィオの生存本能に火を灯す。そうだ、私はこんな所で立ち止まってる場合じゃない。戦いを勝ち抜いて、もう一回…

「もう一回、ママに会っんだ」

「それで良い。なら、やるべき事は解るな？」

青年の言葉にヴィヴィオは頷く。

クリスの背中のオーバーブーストOBを起動させる。

圧倒的な推進力を生み出したOBはクリスとノーマルの距離を一瞬で縮める。

「来るな、来るな来るな来るなあっ！！」

ノーマルがマシンガンを乱射するが、超高速で動いているネクストに命中するはず無くそのノーマルはチェインガンで蜂の巣にされる。

そのままQBで他のノーマルやMTの攻撃を躲し、PAの回復を待つ。

そして、クリスは敵が密集している地点に滑り込み、アサルトアーマーAAを放つ。

攻撃に転じたコジマ粒子の装甲は、P Aの消滅と引き換えに周囲の敵を一掃する。

「ミッション完了だ。帰投しろ」

青年の言葉にヴィヴィオは一つ、息を吐く。

「初めての实战にしては上出来だ。よくやった・・・とは言え余り調子に乗るなよ。敵が弱すぎたんだからな」

ヴィヴィオ達が戦闘を行っていた地域。そこに一機のネクストが現れる。

「そんな……、遅かったの……」

かのホワイト・グリントと同一のフレームを持つ漆黒の機体を操るリンクス、エリオ・モンドリアルはオペレーターであるキャロ・ル・ルシエの声を聞いて溜め息を吐く。

「帰投しよう、キャロ。企業に見つかっても面倒だしね」

そのままエリオはO Bを起動。戦域から離脱する。

ランク5位のエリオにとって企業の部隊を壊滅させる事など造作も無いが、それで企業から睨まれるのもエリオにとっては勘弁したいことだった。

「そう、だね。エリオ君」

やや遅れてキャラが返事をする。

「I'm thinner、か。管理局みたいに正しい思想が正しい答えになるとは限らないんだけど・・・」

「何か言った？」

「ただの独り言だよ。あまり意味は無いけどね」

そのままエリオは呟く。

「ようこそ、ヴィヴィオ。僕は君を歓迎するよ——」

「——で、なんで私たちを招集したんだ？王小龍」

くだらない案件ならすぐに回線を切ると、その声は暗に言っている。

「それにつきましては、私から説明させてもらいます。ステイレツト様」

たおやかな印象を持つ声が回線を通して響き渡る。

「議題はとあるリンクスの扱いについてです」

「何だ、カレードはどのリンクスも平等に扱うんじゃないのか？」

茶化すような壮年の男性の声が形式上の疑問を投げかける。

「・・・、そのリンクスを見出した人物が“彼”だったとしても、ですか？ローディー様」

“彼”と言う言葉に場の空気は一変する。

「……所詮あの男は落伍者だ、恐れるほどでもあるまい」

「最近はどうも、物を知らない若造が増えているようだな」

若い男の声に嘲るような男の声が被る。

「なんだと？」

「そこまでだ。思う所があるのなら戦場で好きなだけやると良い。誰も止めはせん」

老人の言葉に二人は口をつぐむ。

「……、とりあえず、GAは例のリンクスに対して問題行動を起こさない限り不干渉を貫くつもりだ」

「インテリオルも基本的にはGAと同じだ。わざわざ藪をつついて蛇に噛み殺されるのも愚かと言う物だろう」

「後はオーメルだな」

老人は先ほどの若い男に問いかける。

「……上に同じ、だ」

「では、例のリンクスについては他のリンクスと同等の扱いをするという事で」

そして、各々が回線を切る。

そこには、もう誰もいなかった。

青年の車の中、ヴィヴィオと青年は無言だった。

「・・・戦果は上々、報酬にも多少色がついた。よくやったな。ヴィヴィオ」

青年は助手席に座るヴィヴィオの頭を軽く撫でる。

「……、e - o hさんは、何も思わないんですか？」

「別に。いちいち相手の事なんざ気にするな」

青年…… e - o hはヴィヴィオの質問にそう答える。

「そんなんじゃないぞ。長生きは出来ないぞ。お前にはまだまだ稼いでもらわないといけないんだからな」

それに、とe - o hはヴィヴィオに言う。

「俺からしてみればお前が生き残ればそれで良い。大体いちいち敵の心配なんざするのは相手の意志を汚す行為だ。傲慢だと俺は思うが」

「……でも」

「どうしてもってならその気持ちを決して忘れるな。それが無ければ人はケモノと大差無いんだからな」

青年は一人の男を思い出す。愛と思想の歌を口ずさみ、虐殺を行うおとした男を。

「さ、もうすぐ家に着くぞ。今日からここが俺たちの家だ」

（後書き）

感想お願いします!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7808x/>

ACfA?リリなの お試し版

2011年10月21日02時05分発行